

# 河を渡って家族の中へ

—— Raymond Carver の “Nobody Said Anything” (2)<sup>1)</sup> ——

中野学而

## 6. 自己犠牲的な父、自己拡張的な息子

作品と作家の伝記的状况を一足飛びに結びつけることには慎重であるべきである一方、「作家が書くものはすべて自伝的である」ともレイモンド・カーヴァーは言っている (Gentry and Stull 41)。むろんこれは一種の比喩だが、また様々な意味である種の真実を表してもいよう。たとえば “Nobody Said Anything” の執筆は作家 35 歳のときの 1973 年、その一方作家の父クリーヴイー・レイモンド・カーヴァー (以下 “C. R.” と表記) は、晩年、10 歳の違う兄フレッドとともに働いていた職場の製材所で蒙った怪我のせいで長い闘病生活が続いたあと、本格的に体調をとりもどすことなく 1967 年になくなっているのだが、自伝的エッセイ「父の人生」(1982 年) によれば、おそらく自らの死の少し前、作家になりたいという夢をはじめて告げた息子レイモンドに対し、次のように語ったという。

「何の話が書きたいんだ？」父は知りたがった。それから、まるで私の助けになるとでもいうかのようにこう言った。「お前がよく知っ

---

1) カーヴァー作品からの引用はすべて Library of America 版で行い、和訳は筆者が行っている。

ていることを書け。一緒に釣りの旅に行ったときのことを書けばいい」。そうするよ、と私は言ったが、自分にそんなことをするつもりなどないことも意識された。「書いたものを送ってくれ」と父は言った。そうする、と私は言ったが、結局送ることはなかった。釣りに関することなど書くつもりもなかったし、そのころ私が書いていたものなど、どのみち父は何とも思わず、理解することもないだろうと考えていたのだ。それに父はそもそも読書家ではなかった。私が念頭に置いていたような読者ではなかったのである。(725)

怪我、失職、アルコール中毒、と様々な意味で人生の失敗者となっていた父への深い愛を、淡々としながらも温かい筆致で描いて読者の心をつつエッセイ“*My Father's Life*”において、最も微妙な陰影をはらんだ箇所からの抜粋である。カーヴァーの短編小説群の中で「釣り」に関するものと言えば、よく知られたものでもこの“*Nobody Said Anything*”以外に“*So Much Water So Close to Home*”や“*The Third Thing That Killed My Father Off*”などいくつかあるが、このときは「釣りに関することなど書くつもりはなかった」、たとえ父に書けと言われても自分は別のことを書くつもりであったし、また実際に別のものを書いてもいた、とこの語り手は言う。ここで語り手の言う「別のもの」がどのようなものであるかははっきりとしない。釣りの話とは別のもの、ということなのか、あるいは父と旅をするような話とは別のもの、ということなのか。ここで彼はどのような読者を「念頭に置いている」のか。いずれにせよ、父と釣りとはわかちがたく「自らのよく知っていること」、つまり自らの出自と結びつきつつ、自分が目指すべき文化的な高みに存する「読書家」たちの世界よりも低い世界の出来事、と（浅薄なかたちで）見積もられている節がある。そして、それをこのように、控えめながらも自らに手厳しく——と筆者には思える——描き出す語り手

のスタンスに鑑みれば、総じて、この引用からは、父と自らの作家活動との深いつながり——ほとんど、父をある種の「文学上の師」と仰いでいるような雰囲気もある——と同時に、作家がある時点ではそのことを恥じつつ強く抑圧していた（あるいはそれをそのように感じていた、と回顧的に考えていることをここで示したく思っている）こと、その原因である自らの度し難い野心、思い上がりへの強い後悔（を回顧的に考えている、ということを示したい思い）さえもが感じられるように思う。

カーヴァーの上記のような自伝的エッセイ群やインタビュー発言などがいかにフィクショナルなものでもあったか、ということは2017年出版の実の弟ジェイムズの手記の主題のひとつでもあって、カーヴァーが自らの少年時代をフィクション化する際、ある種の強い事実の歪曲が行われていたことはすでに明らかになっている。有り体に言えば、カーヴァーの少年時代は、決してカーヴァー自身が様々なところでほめかすほど「悲惨なもの」ではなかった、というのである（Kleppe, "Biography" 8）。ある種の自己イメージを提示するための相応の自己劇化が行われている、ということになるだろうか。上記エッセイの読解に関しても、まずそのようなカーヴァー作品における自伝的要素のフィクション性に関する可能性は念頭に置かねばならない。事実、たとえばここに描かれているような会話が（もし本当に起こったとすれば）交わされた時点（おそらく1967年の父の死の少し前）では、彼はすでに“Pastoral”という「釣り」を題材にした短編を書いて出版もしていたと思われる（出版は1963年）し、ここでは父が自らの職場のあるヤキマを離れて兄とともに少し離れたチェスターへと赴くことになった理由は「単に運試しがしたかったためだろう」（722）とされているが、のちに論じるように、年の離れた兄への忠誠心がそうさせた、と見るものも多い。

そのうえで、このエッセイ全般に横溢する父への率直な情愛の深さは

重要である。妻マリアンによれば、この世の中で誰を一番愛しているか、と出会ったばかりの19歳のカーヴァーに彼女が尋ねたとき、彼ははっきり「父さんだな、父さんを誰より愛している」と答えたともいう (Burk Carver 5)。むろん、それがどこまでカーヴァーの心のうちを忠実に表しているのかはわからない。しかし、そのうえでなお、この短編“Nobody Said Anything” (あるいは“*So Much Water So Close to Home*”についてもこのつながりで論じたいが、また稿を改めたい) の内容を踏まえつつ、あるいはカーヴァーの全キャリアを見渡す地点から改めて上記のような記述の含みを考えなおすとき、彼の父への愛情は、一方で非常に素直で自然なものでもありつつ、それがそのまま常に父とのあいだの埋めがたい距離を強く意識させられる要因にもなるような、独特の陰影を帯びた抜き差しならない種類のものだっただろうと思わずにはいられないのである。

カーヴァーの父 C. R. は、無口で思慮深い面と同時に、気さくで放埒な社交家の面ももちあわせた人物で、ある面非常に寛大で、他人への共感力に長け、自分 (の核家族) のことよりも他人や友人たちのために尽くすことを先にするような「私心のない」 (Sklenicka 15, 24-25, 49) 人物でもあった。労働組合に強いシンパシーをもち、そのことを生涯誇っていた (Sklenicka 7-8)。グランド・クーリー・ダム建設に参加したが、その成功に際してのルーズベルト大統領のスピーチを批判的に聞きつつ、「大統領がその中で工事中に死んだ作業員たちに言及しなかったことに苦言を呈した」 (Sklenicka 9) という。カーヴァーの少年時代、一族は貧しいながらも緊密なコミュニティを形成しつつ、アーカンソーからワシントン州へとやってきて、助け合い暮らしていたのだが、その暮らしの中心にいたのが、10歳年の離れた兄フレッドやカーヴァーの父 C. R. であった。

やがて、彼ら一族はそれぞれのやりかたで独自に階級上昇を遂げていくのだが、一族の成員たちの中で自分の一家だけが経済的に常に困窮してい

たのは、ひとえに上記のような C. R. の一種自己犠牲的な性格による、とカーヴァーの弟のジェームズは述懐しているし、カーヴァー自身も、母の「あの人のポケットには穴が開いているのよ。いつも他人のためにばかりお金を使ってしまっただけ」という苦言を上記エッセイ「父の人生」に引いている (Sklenicka 25)。

冒頭に述べたように父 C. R. は、1957 年の夏、年長の兄フレッドとともに働いていたカリフォルニア州チェスターの製材所で蒙った怪我がもとで健康状態が悪化、以降健康を回復することなく 1967 年になくなっているのだが、カーヴァーの弟ジェームズによれば、ここにいたることの顛末は複雑である。1957 年、兄フレッドは働いていたワシントン州ヤキマの製材工場の上司とそりが合わずに解雇され、新たにカリフォルニア州のチェスターという町の工場でのこぎりの歯研ぎ職人の職を得るのだが、その際、ヤキマの工場とともに働いていた弟つまりカーヴァーの父 C. R. を誘い、工場を辞めて、自分が働きはじめたチェスターの工場にくるように「促した (encouraged)」、というのである。ジェームズは、「父はヤキマを離れる必要はなかった。でも運が悪いことに、彼はフレッドの申し出を受け入れたのだ。その申し出こそカーヴァー家の没落のはじまりであり、この緩慢な悪性の崩壊劇によって我々はすべてを失うことになった」とまで書きつつ、父が兄フレッドに従ったのは「忠誠心からだ」のであり、怪我をして解雇された「兄を支えないといけない」と思ったからだ「信じる」(James Carver)、と言っているし、カーヴァーの妻マリアンもその手記の中で「1956 年の夏、フレッドは経営者とトラブルになり、解雇された。彼はカリフォルニアで仕事を見つけた。C. R. は、そのまま仕事を続けようと思えば続けることができたが、義侠心から彼は兄の後を追った」(Burk Carver 26) と言っている。スクレニカの伝記では、この経緯については次のような説明がされている。

まず、工場における新しい上司がやすり工程に導入しようとした変化に反対したため、フレッド・カーヴァーが head filer としての職を解雇された。会社は彼にヒラの職を提供しようとして申し出たが、彼にはその仕事に必要な指がなかった〔仕事上の怪我で失っていた〕ので、それは最初から不可能な話だったし、そのことは会社の方でも当然理解していることだった。フレッドの解雇から数週間たためある日、レイモンドは父と一緒に父の仕事場に来ていた。C. R. が仕事を始めぬうちに、息子の見ている前で、工場長がやってきて彼に最後の給料袋を手渡し、解雇を言い渡すと、彼らはその場を追い出された。当時発電所で働いていたピエティは、二人のレイモンド・カーヴァーが工場の敷地を歩いて後にするのを見たという——「父と息子があの朝去っていったその様子を、俺は生涯忘れない。歩きながら、レイ（父）は完全に打ちのめされているように見えた」（41-42）

この内実は定かではないが、ジェイムズとマリ안의証言を総合すれば、手負いの兄に対する C. R. の哀れみ、義侠心、自己犠牲の精神が、図らずも、彼のみならず自らの愛する家族を犠牲にすることとなった、というあたりになるかと思う。スクレナカは、上記引用部でも C. R. が工場を辞めた真の理由を確言することは慎重に避けている。しかし、自ら進んで辞めたことは間違いない、ということだけは確かめつつ、どことなくジェイムズらの見解を支持しているように読める。C. R. はこの直後、工場で怪我をして健康を崩し、以降健康を回復することなく、一家は基本的に妻と下の息子ジェイムズの稼ぎや生活保護でようやく成り立つものとなる。怪我の知らせを受け取って、カーヴァーは父に会いに行ったが、「[そのとき] 父は会社のバンガローで暮らしていた。すぐに父だと認識することができなかった。しばらくのあいだ、認識しなくなかったのだと思う。彼は

瘦せて青白く、途方にくれていた。ズボンが絶えず腰からずり落ちていた。まったく父のようには見えなかった。母が泣きだすと、父は彼女の腰に手をまわし、あいまいにその肩をたたいた。自分でも何が起きているのか理解できない、という風だった」(723)。

少し健康を回復すると、父は時々レストランの皿洗いなどをして小銭を稼いだという。ジェイムズは回想する――

母はウェイトレスをして、父は皿洗いをした。ある時、レイと私とで父が皿を洗っているレストランに行ったことがある。汗まみれになって父は皿を洗っていた。それは恐ろしい光景だったし、レイは胸が張り裂けそうな思いで見えた。(Sklenicka 64)

カーヴァー自身は上記エッセイ“*My Father's Life*”においてこのきわめて重要な事実について一言も触れていないので、彼が父のチェスターへの移住の決断をどのように受けとめていたのかはわからない。むろん、関係者が多すぎて書けなかった、ということもあるだろう。しかし、この決断を境にカーヴァー一家が坂を転がり落ちはじめたのは間違いのないことなので、家族のなかでこの決定的事件に関するそれぞれの真剣な解釈が存在したこともまた間違いなく、彼に彼なりの考えがなかったはずはない。少なくとも、それが上記エッセイで言及されるような、「単なる運試し」がしたかったのだと思う、というような表面的なものにとどまるものでなかったことはおそらく間違いのないことだろう。

元気だった頃、父 C. R. は愛する二人の息子たちに釣りや狩猟のてほどきを存分に行った。もともと裕福ではなかったカーヴァー家だが、おそらく子供たちにそれらの用具を買うことでほとんどの稼ぎは消えていたのだと思う、とジェイムズは回顧する。その手記は、彼と兄レイモンド、父 C.

R. との釣りや狩り、様々な野外活動への愛に満ちあふれた、非常に美しいものになっている (James Carver, "Excerpt")。そのような父の「転落」は、息子(たち)にとってどのような意味をもったのか。

上記の "The Third Thing That Killed My Father Off" (「父を死へと追いやった3番目の出来事」) においては、釣りの問題と関わりつつ、破滅してゆく友人に引きずられるように自らも破滅してゆく「父」の姿が描かれている。語り手の父は堅実な仕事をもち、友人も多く、家庭生活もそれなりに順調である。だから、同僚であり友人でもある人物の突然の死も、悲劇的な同僚の死であるとはいえ、必ずしもその死体を目撃した一人の常識的な家庭人を死に追いやるほどの衝撃力をもつものとなる必然性はない。それでも、ある意味、この物語における父は、それまで親しいながらに見下してもきた「ダミー」と呼ばれる友人の湖への投身自殺死体を目の当たりにしたのち、象徴的には、あえて自らもその湖の底へと進んで飲み込まれていったことになる。いったい、なぜそのようなことになるのか——そう言えば、「釣り」を描いたものとして上に挙げたもうひとつの物語 "So Much Water So Close to Home" も、やはり自らに直接は関係のない、水死したある人物に激しく——理不尽なほどに——共感することで進んで自らの生活を狂わせていく人物の物語であった。

長男レイモンドはのち、一族のなかではじめて大学に行き、紆余曲折を経ながらもやがてアメリカを代表する作家にまで上り詰めるわけだが、幼き日に釣りや狩猟について手取り足取りいろいろなことを教えてくれ、自信にあふれているように見えたに違いない父が、前セクションで見た傷だらけの大物の魚を地で行くように、自分の生活水準のさらなる向上と大成功を夢見るよりもむしろ「安定した職」(719) を求めながら、家族たちや他人の苦しみに身を寄せて、労働者階級からスタートした人生のレースとともに走ってきた仲間や親族のなかで孤独に落ちこぼれていったことを、

カーヴァー自身が実際のところどのように考えていたのかはわからない。しかし、母親譲りのプライドの高さと内向性（Sklenicka 19）、単なる「野心」という言葉では言い尽くせないほど大きな夢をもつ若き息子が、そんな自分にまさに釣り合うような燃え滾る野心を持ちあわせた妻と巡りあうべくして巡りあい、ともに激しく夢を追いかけ始めるなか、先の引用に表れているようなかたちで、傷ついた兄を気遣ってその後を追ったことがきっかけとなって人生に敗北していった父を、世間の目で見てもどこか引け目に思う瞬間——見下す、とあえて言ってもいいのかもしれない——はきっとあっただろう。スクレニカも「彼[カーヴァー]は父の不甲斐なさに対し、怒りを覚えていたに違いない」（57）と言っている。

余田剛によれば、作家となるために故郷ワシントン州を離れ、夫婦で様々な半端仕事を掛けもちながら大学に通って必死に夢を追い求める若きカーヴァー夫妻の生きかたは、「夢を実現するには回り道などしてられないという発想」、あるいは「夢を非常にストレートに、悪くいえば短絡的に追求する」姿勢によって特徴づけられるという（62-63）。若き二人の暮らしの基調と、それに対するのちの反省とその内実は、1976年に書かれた“Distance”という短編によく表れている。赤ん坊の存在のせいで自らの夢をあきらめることを妻に迫られるきわめて野心的な夫——その意味では妻自身もそうなのだが——の姿が描かれているのだが、その設定にも表れているように、端的に言って若きカーヴァーの暮らしは、これを書いた当時の彼自身から見れば、自らの「突拍子もない夢」（“wild dreamers” 918）の実現を最重要の目的としつつ、親、親戚たちとの関係のみならず、最終的には妻や子供の存在をもそこに従属させる、あるいはほぼなきものとするようなかたちに収まってしまっていた、と感じられるものだったと思われる。のちに短編「親密さ（“Intimacy”）」の主題となるようなかたちで、カーヴァーは何よりも書くことを人生の諸事の優先順位の筆頭に置き

ていたというが (Kleppe, "Biography" 9)、妻や子供たちを愛していた彼自身にとっても、また家族にとっても、それは必ずしも通常の意味での幸せを家庭にもたらすものではなかっただろう。しかし、彼には絶対にそうしなければならない、という「燃え盛る炎のような情熱」があった、と弟ジェイムズは言う (Kleppe, "Interview" 21-22)。

スクレニカは、アイオワシティで父の死の知らせを聞いた彼が当時のことを考えつつ書いたノートのエントリーとカーヴァーの詩作品 "The Photograph of My Father in His Twenty-Second Year" を結びつけつつ、それらに共通しているのは「恥」の感覚であり、彼は「自分は父に人として劣っている」と考えていた、と述べている (134)。小学校のころ、同級生のなかで自分の家だけがプレハブの「外便所」を使用していたことを恥じるあまり、何かの折に学校の先生の車で家まで送ってもらった際には、違う家の前で車から降ろしてもらったこともあるという (721)。もちろん、そのように自らの出自を「強く恥じる」価値観は、逆にそのようなかたちで「成功の夢」に目がくらんだような自分は、本当のところでは父に倫理的にはるかに及ばないのではないか、むしろ自分こそ父に認めてもらえてすらいけないのではないか、という疑念や劣等感をその裏に生みもしたことだろう。その二律背反の心的状態は、お互いがお互いを否定／増幅させながら昂進していったことだろう。父とは対照的な、「ホワイトカラー」としての成功の夢のみに取りつかれたような自らの自己中心的な人生が、つまりは作家になるという自らの夢の実現のみに固執し、そうであるにもかかわらず成功もなかなか見えずにいる自らの典型的にアメリカ的／個人主義的な生きかたと、さらにその中途半端さ、不徹底さが、鋭いうしろめたさのようなものとともに振り返られることがきっとあっただろう。

こう見てみると、子供の世話に時間が取られることによって長編小説家になる夢が断たれた絶望と、それがゆえに短編小説家とならざるを得

なかった必然性が描かれる真摯（とひとまずは思える）なエッセイ“Fires”も、どこか舌足らずなものにも思われてくる。子供の世話をしなければいけないせいで創作のための時間が取れずに苦しんだのは、無論事実だろう。しかしカーヴァーにとって、子供の存在のせいで自らが描いた成功の夢から見放されてしまった、ということが、いったいどれほど本質的な問題だったのだろうか。生まれてきた子供たちが悪い、とでも言いたいのだろうか。それが単なる身勝手さでもあることを、あるいはある意味では事実誤認でさえあることを、カーヴァー自身が理解していなかったはずはない（Sklenicka 377）。だから、もしそれがほんとうに問題であったとするならば、それはむしろ、そのような自らのアメリカ人としての「夢」の意味それじたいに深くかかわるような、はるかに大きくて重要な問題のカムフラージュとして、だったのではないか。つまり、普通のアメリカ人らしく「自己を信頼」（“self-reliance”）して「成功の夢」を見ることによって、子供たちではなく、むしろ父の「私心のない（selfless）」非アメリカ的な生きかたとは対極をなすような生きかたに閉塞して出られなくなってしまっていたこと——つまり父との距離——こそが彼のほんとうの苦しみの源泉だったのであって、その意味では、たとえそのような生きかたのまま夢（「長編小説作家となること」）を実現したところで、苦しみは決して消え去るものではなかったのではないか。それはむしろ、成功すれば成功するほどより深く深刻なものになっていくような種類の苦しみにちがいないからである。

カーヴァーは、そのキャリアの特に前期から中期に関して、よく「ブルーカラー階級の絶望」を語る作家の代表などと言われるし（Meyer 1）、その描き出す世界は「希望を失った村（“Hopelessville”）」などとされることも多い。それはもちろん間違いではないのだが、このような文脈においては問題含みでもある。作者としての彼自身は、決して「希望を失った村」の

住人などではなかったと思われるからである。確かに彼は貧しい労働者階級の出身でもあり、人生の途上で破産宣告を何度も受け、アルコール中毒にもなり、絶望のどん底に堕ちもした。しかし彼は、決してそこであきらめたわけではなかった。意思の弱さを認める強さ、という二律背反が彼の人生においてよく言われるが、おそらく、アルコール中毒の底に沈みながらも、徹頭徹尾、彼には人生をあきらめるつもりなどなかった。有り体に言って、彼は、どんなに苦しくとも夢をしぶとく追い続け、たとえ何度負けたとしても、最終的には自らの苦しみや敗北じたいを勝利へと強引に転換してしまう強靱な意思の力と燃えたぎる情熱とを兼ね備えた、たぐいまれな人物であった。実の弟ジェイムズや娘のクリス、あるいは息子ヴァンスは、兄／父への深い敬意と愛情とを十分すぎるほど表現しながら、それでもやはり、作家としての自己実現こそを常に第一のものと考え、その実現のためには肉親を明白なモデルとしつつあまりにも不当なかたちで描写することもいとわなかったカーヴァーへの複雑な気持ちを折に触れて吐露している（Kleppe, "Interview" 22; Sklenicka 378, 428）。

アルコール中毒に代表されるカーヴァー自身の「転落」は、成功が遠のいていくこと、落ちていくことそれじたいの苦しみより、むしろ父のあとを追って落ちていかなければならない、しかしどうしてもとことん落ちていくことができない、誰にも大きな迷惑をかけずにひっそりと一人でそのまま落ちていくことを「よし」とできない、家族を犠牲にしてでも、自分一人だけでも這い上がりたい、這い上がらなければならない、とでもいうかのような自らの成功にかける悪魔的なまでの執念がもたらす苦しみのほうが、その要因として大きかったのではないか。そのような自分が、社会の「負け犬」たちの声を代弁する、などと評されてしまうことの欺瞞性——特に父 C. R. のような人物との間の抜き差しならない関係を思えば、少なくとも、これが作家としての彼にとって最後まで——“Elephant”や

“Blackbird Pie”、あるいは“Nobody Said Anything”と同じく少年の視点で描かれた畢生の傑作“Errand”の時期まで——大きな問題であり続けただろうことはおそらく間違いない。

それを踏まえれば、別のインタビューでの次の発言は注目に値する。

あの短編 [“Nobody Said Anything” のこと] を書いた時、私には自分が何か特別なものを書き終えた、ということが分かっていました。そのようなことはすべての書き物に関して起こることではない。でも、あの短編に関しては、何か大したものにおち当たった、という気がしました。それがどういうことか、私には分かっていたのです。(Gentry and Stull 61)

上述のエッセイで「父の望む釣りの話なんか書くつもりはない」と独りごちた自分をあのようなユーモアとアイロニーとともに描き出すことのできた作家が、おそらくその執筆とほぼ同じ時期（1983年9月出版）に行われたインタビューでまさにその「釣りの話」についてこのように語っていることに鑑みれば、後者のなかの「何か特別なもの」についてはこのインタビューでも何も具体的に語ってはいないものの、ここまで議論を進めてきた私たちには、それをある程度具体的に指し示すことは可能だろうと思う。それは、“Fires”で明示的に説かれているような子供との関係ではなく、その裏に隠された父との関係こそが自分の文学に最大の影響を与えたものである、という認識のことであり、父についてフィクションのかたちで理解し、書くことこそ自らの人生にとっての最大の問題であって、作家としての自分にとっての最重要プロジェクトである、そのことに遅まきながら気づいた、そしてまさにそれこそがこの作品の核でもある、という実感である。

## 7. 子供時代の父を理解する

それにしても、なぜこの作品においては、むしろ逆に、少年 R の父は前節で見たようなきわめてあいまいな書きかたしかなされてないのか。セクション 4 の冒頭で引用した箇所でも、少年 R はおそらく嘘を言っているわけではないだろう。きっと父は、ある時点からは、車でここに息子二人を連れてくるだけ連れてきては車のなかでたばこを吸いながら、適当に自分だけの考えごととにふけていることもあったのだろう<sup>2)</sup>。そのような時期はどのくらい続いたのだろうか。自分だけの考えごととはいったい何だったのだろうか。家庭の問題、仕事の問題、あるいは不倫の問題だったのだろうか。あるいはそれを含めた、人生そのものに関する答えの出ない大きな問いだったのだろうか。いずれにせよ、「かつて～したものだった」(39) という表現のなかで、そのことを少年 R 自身がどう思っているのか、父とそのように釣りに来るのがなくなってしまったことを寂しく思っているのか、それとも自分一人（あるいは弟と二人だけ）で自由に釣りができるようになってむしろうれしく思っているのか、そのような感情が少しでも読者に感じられるような書かれかたがまったくなされていないのは、それが重要でないからではなく、むしろそれらの父と弟とにまつわる思い出が彼にとってあまりにも大切なことであり、思い出すことがあまりにもつらいものでもあって、だからこそそれを可能な限り思い出したくないと思っているからではないか、と考えられるのである。不在ゆえに際立つ存在――。

つまり議論は、まさに第 4 セクションですで見えたヘミングウェイの「大

---

2) Lainsbury は、このような少年 R の父の無気力かつ無関心な様子を、ヘミングウェイのいくつかの短編においてニックの父が果たす極めて教育的かつ重要な役割と比較し、「墮落 (“degradation”）」(35) と呼んでいるが、拙論の文脈では、両者はほぼ同じ性質であると解釈されうると考える。

きな二つの心臓のある川」における「立ち入り禁止」の立て札、あるいは「父と息子」における「迂回せよ」という標識へと戻ってきている。そこでは、それらのヘミングウェイ作品のなかでは主人公ニックの（父にまつわる）思い出がある特殊なやりかたで想起されている、ということ述べた。つまり前節の議論の文脈に照らせば、おそらくは、このカーヴァー作品においても、父に手取り足取りいろいろなことを教えてもらったに違いないその思い出が、美しいというだけではない、美しいからこそ苦しいので思い出すことができない、というだけでもない、むしろより強い意味で、鋭いうしろめたさのためにとても思い出すことができない、というような不穏な思いを含め、主人公にとってきわめて重要な意味を持っているのではないか、ということである。もしそのような思いがここにもあるのだとすれば、たとえば少年 R は愛する父や弟と一緒に釣りを楽しみながらも、それでも父により献身的になついている（“devoted”）弟——カーヴァー自身が自らの弟のことを述べたときの言葉である（Sklenicka 135）——のほうが何かにつけてより父からも愛されているようにも思える羨望の苦しみ、さらに言えばそのことによって家庭内で母側、父側へと兄弟もわかれ、父を憎み、またさげすみ、ことによるとその無計画性やうだつのあがらなさを見下しさえもするなかで少年が感じていたかもしれない、家庭が引き裂かれようとしていることへの悲しみや怒り、やるせなさ、そしてそれらへの後悔と贖罪の念、あるいはもっと大きな父という人物の魂の奥底に届くような直感的な洞察さえもが、触れれば切れて血を吹き出すような痛みとともに、この短編の川の流れの底にあるのではないか、と思われてくるだろう。

事実、このあとで年下の少年と出会ってからの少年 R の言動が、それまでとは打ってかわった精彩を帯びていることには明確な意味がある。この年下の少年、「ぼろぼろで小さすぎる長袖シャツ」を着ており、「ネズミ

か何かに見えた」(42)という。見るからに貧しい育ちの少年なのだが、弟と「ほぼ同じ体格」(42)というから、まずはもちろん弟ジョージの分身であり、以降の二人の関係は少年Rと弟との関係をひとまず反映するものと考えることができる。共通の大物の捕獲を目指して二人で協力するところは、さしずめ物語冒頭で見た、今にも壊れそうな不穏な家庭生活のなかで、少しでも両親がよい関係となることを目指して基本的には力をあわせようとする——兄のほうが弟よりも母に強く肩入れしているゆえの感情の行き違いがあるとはいえ——兄弟の様子を彷彿とさせることもあえていうまでもないだろう。

ただ、そのようにして家庭生活のことを考えるならば、ここに重ねあわせられているのは決して兄弟の様子だけでもないように思える。この「出っ歯」(42)の少年が見つけた大物の魚と一緒に捕獲すべく二人の少年が実際の作戦を練るところは、たとえば以下のようにになっている。指示の与えかたが的確で、自らの識見に絶対の自信を持つ彼は、まるで年少の少年にとっての父親のようなふるまいで接しているように思える。

「あいつが見えるか？」僕は言った。少年は見ていた。僕は彼の腕を取り、指をつかんでそいつの方に向けた。「まさにあそこだ。よし、いいか、よく聞け。おれはあのふたつの土手に挟まれた道のところまで行く。どこのことかわかるか？ おれが合図をするまで待ってろ。いいか？ もしお前の方に向かってきたら、今度こそかわされるんじゃないぞ」(44)

前セクションで見た赤い車の女性に母の影が見えるとすれば、この一連の流れのうちで少年Rの言動の影に見えてくるのは、おそらく、かつての彼ら兄弟に対する父の立ち居ふるまいである。彼ら兄弟はそれぞれ、まさ

にこのように父に促されながら、手取り足取り釣りの技術を教えてもらうことで、今の自分自身を作り上げてきた。これは象徴的な話でもあって、彼らが教えてもらったことはもちろん釣りの技術のみに限らない。このようなとき、いわば彼のなかで父のイメージが生きることがほのめかされる。ここにいるのは自分でもあり、父でもある——まさにヘミングウェイの「父と息子」におけるニック・アダムズのように、何をしようかと、どこにしようかと、息子が存在する限り、父も常に「彼とともに」(Hemingway 374) いるのである。

そのように思えば、それと同時に、たとえばこの魚をめぐって夕暮れどきにこの出っ歯の少年といさかいになり、不穏なほどに攻撃的な気持ちにもなりながら、最後には魚を切り裂いて分けることでいさかいに終止符を打つにいたるくだりなどには、どこか、先に少し触れた父との関係における弟への嫉妬の思い、あるいは父への思慕や怒り——さげすみや、ひょっとして殺意さえも——をも薄暗がりの自然の情景の中におちまけているようなところがあるように感じられてもくる。少年の的確な指示に従わずにおめおめと魚を逃がしてしまいそうになるこの出っ歯の少年の不手際は際立っている(43)。あたりには誰もおらず、日も暮れた山奥で二人きり、やろうと思えばいつでもやれる(46)、などという言葉も聞かれるなか、この出っ歯の少年は少年Rの前でひどく無力でおびえている(47)。

弟ジョージと一緒に父に釣りに連れてきてもらいながら、まさにこのようにぎこちなく、それゆえにより緻密に父から手取り足取り様々なことを教えてもらっている弟の姿を目の前にして、日ごろの関係からも、少年Rが激しい嫉妬の思いに駆られる、などというようなことはあったのかもしれない。第3セクションで論じたように、少年Rは、いさかいの絶えない父母のうち気持ちのよりわかる母のほうをかばうことでどうしても愛する父を責めるほうの役に回らざるを得ず、結局父にも弟にも疎まれてしま

い、そのことへのやりきれなさが、前セクションで見たような作者カーヴァー自身の実人生における父との「距離」の問題をフィクション内に呼び寄せながら、このようなさびしい情景を幻想のように呼び出し、あるいはその幻想のなかに彼の存在を巻き込んで、このように少年 R を突き動かしているのかもしれないのである。そうであれば、この出っ歯の少年が魚を前にして素直に次のように言うのは幾重にも示唆的となるだろう——「僕、これをお父さんに見せたいんだよ、ものすごく」(45)。

この少年の登場と退場したい、すでに見た赤い車の女性と同じくあまりにも唐突であり、どこか現実とは思えない不思議な雰囲気に含まれている。それまで誰もいなかったクリークに突然自転車で登場し、少年 R とともに魚をつかまえて一緒に自転車に乗って帰るのだが、夕闇の訪れとともにふいに舞台から消えてしまうと、そのすぐあとと舞台上に登場するのはやはり自転車に乗った弟なのである。そのネズミのような風貌が何を意味するのかわかりにくく、これまでもまったく言及されたことはないのだが、「痩せている」(42) という点に注目すれば、前セクションで見た、病に倒れたのちの作者カーヴァー自身の父と同じように、やはり痩せていることが何度も強調されるこの大物の魚じたいと結びついていることがわかる。この魚、種類は明示されておらず、少年自身は「ニジマス」(“Summer Steelhead”) (48) であると言っているが、「腕の長さくらいある」(42) 大物で「あまりにも痩せて」(45) おり、物語の結末から言えばその頭は「蛇」(48) にも見える、という。作者自身は、インタビューではこれは「チョウザメ」であることをほのめかしている (Gentry and Stull 60) のだが、確かに、チョウザメはヒゲのある顔がまさにネズミに似ているのである。すでに第 4 セクションにおいて、この大魚がニジマスとともに父自身 (の傷ついた姿) を彷彿とさせることは述べておいたが、そうであれば、ことによると、このやせ細って寒さに震える出っ歯の少年も、少年 R の弟の影

であると同時に、やはり少年 R の父の影、幼き日の父自身の姿でもあることになるのかもしれない。作家カーヴァー自身の父 C. R. は、年長の兄フレッドの先導のもと、1929 年に「泥沼の経済状況」(Sklenicka 5) に苦しむ南部アーカンソーからトラックに荷物をくくりつけて一族で西海岸のワシントンにやってきた貧しい労働者階級一家の次男だったが、この少年のぼろぼろの身なりと寒さによる震えは、時空を超え、おそらくどこかで当時貧困にあえいでいた少年時代のカーヴァーの父のイメージにもつながっているように思える。

そう思えば、少年 R の前でのこの少年の怯えた自信のない様子は、もしかすると、カーヴァーの実人生における父、つまり将来何らの大事を成し遂げそうな強烈な自我を持つ長男にいずれ圧倒されることを予感するかのような、人生の敗残者としての父の目が、ときに息子が見せる自らを責めるようなまなざしの前で醸し出す雰囲気とさえつながっているのかもしれない。そのとき、そのようなネズミに似た少年の生殺与奪の権利を握ってもいるかのような少年 R は、父の父、すなわち祖父の目で父を見ていることにもなるのだろう。こうして追憶の河をさかのぼりながら、傷つき、仲間たちのレースから一匹はぐれた大魚のまわりにこのようなイメージを乱反射させるにいたった少年 R の思いは、「父の人生」のまさに真髄にまで達している、と言ってよいだろう。

その意味では、少年 R と出っ歯の少年とのこのような明らかな上下関係は、物語最後に見える母と父との間の関係（いらだつ母がフライパンを投げ、父が床にぶちまけられた調理物を拾っている）にも重ねられているように見えるところがある。母と父とがこのように見えている、ということなのだろう。ここでは、冒頭のイメージとは違い、父のほうが関係の「劣位」に置かれていることが際立っているのだが、この線をさらにカーヴァーの実人生との関係において敷衍すれば、もしも出っ歯の少年が幼き日の父

の姿であるとする、その少年に的確な指示を与えて少年を動かす年長の少年 R は、「父の父」であるというより、むしろ「父の兄」の影と呼ぶほうがふさわしいかもしれない、とも思えてくる。事実、前セクションで述べた赤い車の女性との道行きのなかで、自らの性的な妄想に刺激を受けて性器を固くさせた少年 R は、被っていた野球帽でズボンの前を慌てて隠すのだが、その直前の描写は以下のようにになっているのである。

「どこまで行くの？ パーチ・クリークかしら」

僕はまたうなずいた。自分の帽子を見た。おじさんがシアトルにホッケーの試合を観に行ったときにお土産に買ってくれた帽子だ。それ以上何を言えばいいのか、僕にはわからなかった。だから窓の外を見ながら頬っぺたをへっこませていた。こういう女に誘われるなんて、まさに夢見ていた通りの展開だ。(38-39)

物語の展開には特に何の関係もなさそうな「帽子」に関するディテールだが、この論考の議論においてこの何気ないディテールは注視に値する。この「おじさん」とは、いったい誰のことか。なぜこの「おじさん」のことを、ここで一瞬でも少年 R が思い出す必要があったのか。もちろん、物語じたいの展開においてはとくに意味はない。村上春樹もこの「おじさん（“uncle”）」を「叔父さん」ととくに意味をもたせることなく（と読めるようなかたちで）和訳している（99）のだが、ここまで進んできた議論の文脈では、やはりこの「おじさん」の訳としては、「伯父さん」のほうが適切だろう。カーヴァー自身の父 C. R. は、先ほども見たように 10 歳も年の離れた兄フレッドと大変懇意にしており、ほとんど「兄弟仁義」を思わせるような関係だった。彼にはほかに姉が二人いるが、「兄弟」と言えば彼にはこの「兄」のフレッドしかいない。すでに述べたように、この

物語の大きな主題のひとつがまさに兄弟関係でもあることを思えば、このような状況に顔を見せているのは、おそらくは父には兄がおり、少年 R の心のなかには、自分自身の状況と引き比べつつ、そのような「弟としての父」への関心が潜んでいる、ということなのであり、それは結局のところ、母への思いに比べてあまり考えてくることのなかった父のことこそを理解したい、近づきたい、近づかなければならない、と考える少年 R が、かりにも父を理解しようと思うのであれば、いくら父のことだけを見ても十分ではない、自分の弟との関係や母との関係をじゅうぶん考慮に入れてもまだ足りない、父自身がその家族、とくに愛する兄や父に対してもっていた思い、その関係の意味を理解しないと決してわからない、と考えている状況と理解すべきかと思う。そのことはもちろん、翻って、おそらくカーヴァー自身が父 C. R. の人生を考えるにあたって、その最大の事件としての兄フレッドとの製材工場辞職事件のもつ意味を考えなければならない、と考えていたことに由来するだろう。なぜ父は、やめる必要のない仕事をやめて、わざわざ家族を路頭に迷わせようとするかのように兄について行ったのか――。

人間は決して個人単位で完結するものではない、という世界観は、アメリカ人の読者にとって、そしてもはやアメリカの影のもとで 76 年（人の一生ぶんの長さである）を過ごしてきた我々日本人の多くの読者にとっても、おそらくこの物語の最終的なメッセージとして十分な重さをもつことにもなることだろう。

#### 8. おわりに――引き裂かれた魚、引き裂かれた心

以上に論じてきたようなことは、その表面上の分裂の危機にもかかわらず、いかに少年 R の家族同士のお互いへの深い愛や気遣い、またそれらの温かい感情があるからこそ高まるさまざまな負の感情が、時空を超えて

作者の魂と呼応しながら少年の世界の根底を規定しているのかを物語ってあまりある。

冒頭にも述べたように、この物語は、すでに病に侵された作家が自らの死を意識しながらまとめた、自らのキャリアをクロノジカルに大きく俯瞰するコレクション *Where I'm Calling From* の劈頭を飾る作品である。その意味では、おそらくこの少年 R は、その後、カーヴァー自身の人生の軌跡をなぞるように、大きな夢を自分とともに見てくれるよき伴侶を得て、アメリカ社会の中核に挑みかかっていくことが予想される。その過程で、彼は作家のペルソナの原型としてさまざまな人物に化身しつつ、傷つき、苦しみ、破産や浮気を経験し、暴力をふるい、最も傷つけてはならない存在をしたたかに傷つけて打ちのめしてはその罪悪感に耐え切れずに酒におぼれ、人生のどん底の淵をさまよいつつも、決してあきらめることのない不屈の情熱の炎を心のどこかに燃やし続けながら、その巨大な夢を現実へと変えていくことだろう。そしてそのことによって、彼はさらに苦しみを深めていくことだろう。それはある意味、振り払おうとした父の影のあとを追いかけていくようなふるまいでもあるのかもしれない。ほんとうの破滅へと着実に一歩一歩近づいていくことで、彼はむしろほんとうの人生——まさに父の人生がそうだったような——により近づいているような感じを得ているのかもしれない。しかし、だからこそ、彼はそこにとどまることもできないだろう。こうして彼は、歩を進める。本論考の冒頭で述べた最後のシーンの「力強さ」は、このことにも関わっている。ある評者は、この論考でも頻繁に参照したスクレニカの浩瀚な伝記の日本語訳出版の際の書評において、「なぜカーヴァーはこうまで犠牲をとめないながら、小説や詩を書き続けたのか、という謎」(平石)に言及しているが、もしかすると、その「謎」への解答のひとつはこのあたりにあるのかもしれない。

“Nobody Said Anything”の最後、びくからあふれて飛び出していきそうな

自我を抱えた彼は、これから家庭の「外へ」飛び出していく。直前で母に「蛇」(48)かと間違えられていることには、エデンの楽園追放の神話の含意がもちろんある。そのなかで、彼は前セクションで確認した父との関係に関するエッセイの述懐に描かれた若き(傲慢な)作家自身と同じく、過去においてこのような家庭のなかで自身の存在に生じたもろもろのことを、まさにこの魚の下半身のように切り離し、自らの意識の外へと放逐していくことにもなるだろう。それは、彼自身の強烈な上昇志向に照らせば恥ずべき世界だからでもあるだろうし、そう思うことじたいが後ろ暗く、思い出すのがつらいゆえでもあるだろう。引き裂かれた魚は、その意味で、彼自身の大人への成長を意味する。そのとき、自らの「下半身」たる少年時代を象徴するものを引き裂き、捨て去ることで、彼は目指すべきまっとうなアメリカ人の大人としての成長を(無理やりにでも)遂げようとしている。

下半身のほうはもちろんネズミのような少年がもって行ったのであって、この少年はどこかで少年時代の父の化身でもあったのだから、すなわち少年Rが捨て去ったのは自らの少年時代のみならず、父の存在そのものでもある。特に、もしもカーヴァーの実人生における父C.R.の人生を規定する言葉が「(なかば心ならずの)自己犠牲」だったのだとすれば、あくまでも捕獲した魚の頭——世間的に評価されやすいと思われるほどの成果——に固執し、策略によって生きた魚を殺して半分になり、オマケを差し出してまで自らの希望を最終的に通してしまう少年Rの機転、抜け目なさ、我の強さは、魚を最初に見つけたのは自分であるにもかかわらず、最終的には「身のついたほうでいい」(47)という言葉に象徴されるように、生活の実的な部分で満足して自らは「身を引いている」ようにも見える出っ歯の少年の「私心のない」ふるまいと比較するとき、より痛烈に作者自らの心に訴えかけるような性格設定だったのではないかと思う。

しかし、捨てたはずの魚の下半身は、やがて必ずその存在を強烈に主張し始めるだろう。彼の人生の道行は、その下半身からの呼びかけにうまく答えることができぬまま、深刻に頓挫しもするだろう。しかしそれは、最終的にはある種の「銀色」(48)の光を放ちながら、彼の意図いかんにかかわらず、常に彼の存在をその根底で照らし、支えていくことにもなるだろう。

少年の思いは、最終的には、傷つき引き裂かれたチョウザメに託される。それは、おそらく妻を愛しながら、妻に存在価値を十分に認めてもらえない劣等感や屈辱、不甲斐なさの感覚のなかでほかの女性になんらかの慰めを求めざるを得ず、そのなかで傷つき引き裂かれていった(そしてもちろん、そのなかで妻や子供を傷つけてもいった)父の姿でもありと同時に、おそらくそれをそのように描き出すことができるようになっている作家自身の心のありかたでもあって、だからこそ、長いあいだ父母の調停役として壊れそうな家族を支えてきた、そしてこれからもそれを続けようとする、少年R自身の引き裂かれた魂の表現でもある。それは父、母、弟のあいだで引き裂かれた魂であり、引き裂かれの深さがそのまま愛の深さの証しそのものとなるような魂である。その引き裂かれの深さに対する少年自身の矜持は、結局のところ、父自身の心のありかと重なる自己犠牲の問題につながっている。それは、両親の関係の修復、かつての幸せな日々の回復を悲願として進んで両親とともに傷つこうとした幼き日の自分自身そのもの、両親が傷ついている限り自分だけが無傷でいることはできないと健気に思い詰めていた自分自身の自己犠牲の姿そのものであり、この時点で作家が理解しえた父の人生の核にある問題の象徴でもあって、だからこそ、カーヴァーにとって自らの文学的営為の起源を余すところなく指し示し、その意義を支えうるものともなるのである。

この作品は、1967年になくなった父 Cleve Raymond Carver へのレクイ

エムである。

## 引用文献

- Carver, James. "Excerpt from Raymond Carver Remembered by His Brother James." *The Raymond Carver Review* vol. 5-6, 2016/2017. *The Raymond Carver Review*. Accessed 30 Sept. 2021.
- . *Full Circle: Raymond Carver and Our Family*. Sore Dove, 2008.
- Carver, Maryann Burk. *What It Used To Be Like: A Portrait of My Marriage to Raymond Carver*. St. Martin's Griffin, 2007.
- Carver, Raymond. *Carver: Collected Stories*. Library of America, 2009.
- Gentry, Marshall Bruce and William L. Stull, editors. *Conversations with Raymond Carver*. Mississippi UP, 1990.
- Hemingway, Ernest. *The Complete Short Story of Ernest Hemingway*. The Finca Vigia Edition. Scribner, 2003.
- Kleppe, Sandra Lee. "Raymond Carver and Biography." *Raymond Carver Review*, vol. 5-6, 2016/2017, pp. 4-8.
- . "The James Carver Interview." *The Raymond Carver Review*, vol. 7, 2019/2020, pp. 17-34. <https://www.raymondcarverreview.org>. Accessed 3 Oct. 2020.
- Lainsbury, G. P. *The Carver Chronotope: Contextualizing Raymond Carver*. Taylor & Francis, 2003.
- Meyer, Adam. *Raymond Carver*. Twayne, 1995.
- Sklenicka Carol. *Raymond Carver: A Life*. Scribner, 2009.
- カーヴァー、レイモンド『頼むから静かにしてくれ』村上春樹訳、中央公論社、2013年。
- 平石貴樹『『レイモンド・カーヴァー—作家としての人生』キャロル・スクレナカ著—多角的に浮かぶ作家像』日本経済新聞朝刊 2013年9月1日。
- 余田剛『「レイモンド・カーヴァー」というアメリカを追いかけて』『言語と文化』13号、法政大学言語文化センター、2016年、39-65。